

●全国セミナー用資料2013.5

■タイトル：介助派遣事業モデル(運営基盤はどのように出来上がるか)

・介助サービス業務における各担当者がいかに連携しさまざまな事例を乗り越えていくか、について考えます。担当の配置の意味や、連携しあう運営のあり方などを学び落とす機会にしたいと思います。

・対象：代表・事務局長・コーディネーター

・講師：石地かおる（リングリング）・岩本肇（アシストM I L）、岡田健司（アークスペクトラム）

■進行内容：仮案（PC講座でのロールプレイをイメージください）

- ・グループワークで事例検討（下記参照）
- ・ピアカン・介助GM・人権担当・CNの役割を選んでもらう
- ・担当者の像をえがく（リーダーシップのあり方）
- ・議論したことを講師陣が再現
- ・やってみた感想

■グループワーク検討事例：仮案

1.シフト変更で穴があいた。介助者を守るため「入浴を断る」決断をしなければならないとき。

2.ある介助者の好き嫌い(シフトに穴あけることが多いので、関わり方が甘いという批判をGMにするCNたち。

3. (歩けるようになるため)リハビリをしたいという障害者。歩行不可でも見つけられる楽しみを探そうとするCNたち。担わされたニーズを本当のニーズとして捉える浅はかさ。自分自身の自立感のギャップによる問題。

4.介助体制を三交代にしたいというCNたち。CN同士でも意見はバラバラ。二交代が自分の心と体にどう影響するか？ 障害者の継続した生活の保障は？ その他介助者の意見は？ 個人的な動機を越えない主義主張に対するGMの判断基準はどこにあるかの問題。

*裏テーマ（今回の研修で伝えたいこと）

- ・介助派遣事業が十分な人・物・金に支えられないのは国の障害福祉の仕組みである
- ・その中で理念なき介助派遣事業（なんでもOK）は運動そのものを弱体化させる
- ・CIL介助派遣事業を体系化し一般の派遣事業所のモデルになってきたものがある
- ・しかしCILの体系化した理念を一般の派遣事業所は浸透させられていない
- ・介助派遣事業は地域で生活できたら「OKです」ではない
- ・長時間介助が必要だと主張してきたのも同性介助が必要だと主張してきたのも（その他いっぱいある）、たがいの権利性を保障し合うための理念である